
魔法少女リリカルなのは～悪魔に魅入られた少女～

飛龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜悪魔に魅入られた少女〜

【Nコード】

N1607BA

【作者名】

飛龍

【あらすじ】

悪魔に魂を汚された少女は機動六課で……

サウンドステージは最新投稿して次話投稿時に時系列へと並び変えます。

00

それは小さな想いだった。

優しく髪を撫でて欲しい。

手を繋いで歩いて欲しい。

求めた想いは伝わらず、心に傷を刻んでいく。

魔法少女リリカルなのは、始まります。

6歳の誕生日に少女が見たのは赤い朱い紅い部屋だった。
臓物を撒き散らした屍が辺りに転がり、その屍の血で描かれた魔法陣。

屍の返り血で赤く染まった少女の母親は初めて少女に笑みを向ける。
それは壊れた者が見せる笑みであった。

目は狂気で濁り、口を歪ませた笑み。

少女へと近付いた母親は少女の真っ白な髪を手取る。

そして乱雑に握ると魔法陣の中心へと引きずっていく。

「母様いたいです、いたいです」

少女は目に涙を浮かべながら、母親を見上げる。

しかし、母親の目には少女は写ってはいない。
そこにある儀式に必要なモノとしてしか写し出しはしない。

少女の両手首、両足首に杭を打ち込む。

魔法陣の真ん中でまるで十字架のように張り付けられた少女は、痛みに泣き許しを乞う。

「ぐめんなさい、ぐめんなさい、ぐめんなさい」

少女の言葉に気を良くしたのか、それとも儀式が最終段階に入ったことに喜びを感じたのか、母様は笑い出す。

アヒヤ、アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ
ヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ

狂った笑いが部屋に響き渡る。

少女は涙で滲む目で母親を見つめる。

その少女の思考は母親の狂気に毒され歪んでいく。

ワタシは悪い子。

だから母様はワタシを殺すのです。

母様為に、ワタシは……。

少女の首を母親がナイフで横に裂く。

血が飛び、まるで少女の血に呼応するかのように魔法陣が光輝く。

気管に血がたまり少女は血を吐き出す。

溢れ出る血、四肢から感覚が薄れていく。

自分の世界が闇へと沈んで行くのを感じながら、少女は母親の笑い声を聴く。

アヒヤ、アヒヤ、アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ

少女が目を瞑り、闇へと身を委ねた時、雷光が走った。

金色の光と共にまるで死神のような装いで現れた女性。

「――っ。時空管理局執務官フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、あなたを悪魔召喚儀式による時空騒乱罪で逮捕します。」

フェイトは現場の惨状に息を飲み、この惨状を起こした者に杖を突きつける。

「邪魔をするつもり？」

笑い声を止めた母親は地を這うように低い声で問う。

「はい、これ以上被害を広めるわけにはいきませんので」

フェイトはそう言つと地を蹴って母親へと切迫する。

振りかざした杖は大鎌のような姿をして、そのまま母親に振り下ろされる。

母親は瞬時に防御魔法の一つラウンドシールドで止めようとするが、フェイトの刃に砕かれて霧散する。

そのまま身に刃をうけ、倒れたところを拘束魔法により、動きを封じられる。

フェイトは倒れた母親を一瞥すると、魔法陣の起点を破壊して、儀式を止める。

そして少女のもとに行き、不慣れな回復魔法を使いながら、少女を看る。

「ごめんね、もっと早く来れていれば」

フェイトは奥歯を噛み締め、自分の力不足を悔いる。

悪魔召喚の情報入手から、出撃許可申請、召喚に誘われた悪魔の送還、現場への到着。

どれを抜かしてもダメだが、もっと早く来たかった。

そうすれば、少女は傷を負うことなく助けられたかも知れないから。

金色の光に包まれて身体を癒やされている時、少女は夢を見た。

優しい両親、暖かい家、可愛い犬。

望んだ世界^{ゆめ}。

でもありえないと理解する世界。

少女は涙を零して呟いた。

「もつやだ……ワタシを殺して」

真っ白な髪 of 少女は黒い服に身を包みながら、夜の町で人を待っていた。

まだ8歳になったばかりの少女が一人ぽつんといるのは目を引くが、誰も声をかけない。

原因は少女が吸う物……タバコである。

口にくわえたタバコから紫煙が立ち上り、少女はぼんやりとそれを目で追う。

星空に消えていく紫煙。

少女はぼんやりと儚いなと思う。

「あゝルキまたタバコを！」

金色の髪を風に揺らしながら近付いた女性……フェイトは少女のくわえるタバコを取り上げる。

「あっ……」

少女、ルキフェール・ハラオウンは声を上げて、奪ったフェイトに目を向ける。そこには怒ってますと言わんばかりのフェイトがいた。

「うゝ」

「唸ってもダメ」

「ぐっすん」

「な……泣いてもダメだからね」

寸劇のような会話をしながら、ルキフェールが持つ携帯灰皿でタバコを処理した後、二人はフェイトの車へと歩き出す。

黒塗りのスポーティーな車。

そこには猫耳の男の子がいた。

黒いふんわりとした毛と黒いしつとりと艶のある髪。

ルキフェールはそれを撫でるのが好きだった。

故に会ったら撫でる。

「主、恥ずかしいから」

「大丈夫、ワタシは恥ずかしくありません」
言い切った主を見上げる猫耳少年。

その目は羞恥心によって若干潤んでいた。

猫耳少年……名をルシファーという。

死に瀕した状態でルキフェールに拾われて、使い魔となった。

元の姿は黒猫。

未だに未熟な部分が多いがルキフェールを主と仰ぎ、主の為に暗躍する猫であった。

「ルキ、ルシファー、そろそろ車出すよ」

フェイトの声に我に返ったルキフェールは後部座席に2人で座り、シートベルトをしめる。

若干余裕があるように調節した後、窓を開け外を眺める。

走り出したことによる風でルキフェールの髪は流れる。

顔にかかりかけた髪をルキフェールは手で掬い、後ろに流す。

映画のワンシーンのようなルキフェールにルシファーは、感嘆の息を吐く。

「どうしたの？」

それに気付いたルキフェールが訊ねるとルシファーは頬を赤く染めながら答える。

「主、とっても綺麗です」

そう言われて、ルキフェールの頬も紅潮していき、何とも言えない空間が出来上がる。

一人取り残されたフェイトはどう声をかけたらいいのか分からず、

暫く1人で悶々とする羽目になる。

トンネルを抜けると海の匂いが鼻を刺激した。

きらきらとした太陽の光を浴びて、海を煌めかせる。

「うわぁ」

ルシファーが海に声をあげる。

フェイトとルキフェールはそんな様子のルシファーに微笑みを浮かべる。

「美味しそう」

.....。

「あゝ魚？」

「うん、飛び魚だよ。美味しそうだよ」ルキフェールはなんだか疲れたように背もたれに身体を預ける。

その様子に首を傾げるルシファー！。

「そろそろ機動六課に着くよ」

フェイトの声に2人は気を引き締めた。これから向かう新しい職場。

機動六課。

その名は未だに人々に噂されることはないが、その部隊を構成する人員は異常であつた。

管理局においてその名を知らないとされるエースオブエース。

【高町なのは】。

桜色の魔力砲撃を味わつた者は桜色の何かを見る度に砲撃に蹂躪された時を思い出し、ガタガタと身を震わせると云う。

戦闘時もしくは訓練時以外では人懐っこい笑顔とスタイルの良さで度々人を魅力している。

それから、敏腕執務官として知られる【フェイト・テストロッサ・ハラオウン】。

有り得ない速度で敵を翻弄する戦い方に見た者は魅了されるという。綺麗な金髪と綺麗な顔、同性から嫉妬を超え敗北感を味わわせるスタイル。

更には天然気味な様子に管理局、果ては犯罪集団にまでファンクラブを持つという規格外。

そして、夜天の書の最後の主にして、蒼天の書の主【八神はやて】
守護騎士たるヴォルケンリッターをも連れて機動六課を設立した張
本人。

狸のような狡猾さと謀殺術でエリート街道を走り、将来的には管理局
の上層部まで上り詰めると言われてる。

デバイスを通した翻訳機能を用いても妙な言葉使いになるというバ
グ持ちでもある。

上記二人のような突出した人を魅了する外見ではないが時折見せる
儚げな姿に魅せられる人は少なくない。

そのような人達が納める機動六課は今動き出そうとしていた。

機動六課の部隊長室への道を歩くのは三人。

機動六課制服に袖を通したフェイトとルキフェール。

燕尾服に袖を通したルシファー。

「主、なぜこのような服を？」

ルシファーは困惑気味に声をあげる。

その様子にルキフェールは鈴の音のような声で笑う。

「似合ってるよ、ルシファー」

そう言っただけフェイトはルシファーの頭を撫でる。

「フェイト殿そういう問題では……」

「ルシファー、気にしないの。かわいいよ」

ルキフェールはそう言っただけ、また笑う。

そんな主を若干涙を浮かべながら、睨むと、フェイトにまた頭を撫
でられていた。

頬を赤く染めてるルキフェールにフェイトは微笑みを浮かべる。

ノックの音に部隊長室で書類を処理していた八神はやては顔をあげて入室を許可する。

「どうぞ」

「失礼します」

「失礼するです」

「失礼させて頂きます」

三者三様の答えにはやては苦笑する。
入ってきたのは、フェイト達御一行。

「お疲れ様や、三人とも」

「ルキフェール囑託魔導師、機動六課着任確認や」

ルキフェールが提出した書類に判子を押して、ファイルに納める。

「そろそろお昼やし食堂行こか？」

はやてがそう言いながら、席を立つとルキフェールは目をきらきらと輝かせ始めた。

「卵料理あるですか？」

「勿論や、オムレツとか色々あるでえ」

「エリオやキャロも喜ぶです」そう言っつてつきつきと退出しようとするルキフェールを腕にしがみついてルシファーが止める。

「主、食堂の場所分かりますか？」

その言葉にルキフェールは顔を真っ赤にして俯きながら、フェイト

の服の裾をつかむ。

機動六課の制服を着込んだ者達が並ぶ中、後ろの方でこっそりと逃げようとした少女を捕まえている少年がいた。

赤い髪の少年、エリオ・モンディヤル。
捕まえられているのはルキフェール。

並び待つ中でルキフェールは急に煙草を吸いたくなったのだ。

バレないようにこっそり抜け出して、海を眺めながら吸おうと思っていたのだが、兄貴分のエリオに見つかり捕まったのであった。

「離すです」

「ダメだよ、もうすぐ始まるんだから」

腕をがっしりと掴まれ身動きが出来ない。

今頃布団でまるくなっている使い魔に若干の恨めしさを感じる。

そうこうしている内にはやてが前に立ち話し始めた。

はやての部隊理念、部隊構成の説明が終わり、フォワード陣で一カ所に集まる事になっていた。

そこにルキフェールの姿はない。

話終了と共に猫のようなしなやかに動き、エリオの阻もうとした手をすり抜け、海に面したベンチに逃げていた。

ライターに火を灯し、口にくわえた煙草に火を付ける。

吸い込んだ煙が喉を通り抜けて肺へと入っていく。

「はあゝ」

盛大に溜め息と共に煙を吐き出す。

新しい職場に対する希望、隊長陣に対する羨望。それらはルキフェールにはいささか眩しすぎた。

ルキフェールの中には悪魔がいる。

一つの街を巻き込んだ665人の血と臓腑で魔法陣を描き、6月6日に6才の誕生日を迎えた自分を悪魔の最後の贄として行われた儀式は、次元震を巻き起こしながら進められた。召還に応じたのは特級の悪魔であった。

現界するだけで次元世界を滅ぼしかねないそんな存在であったと聞いた。

その情報を得た管理局が動いた時には儀式は始まっていた。

自分を魔法陣の中心に張り付け、行われた儀式は私の身体を門として内臓を門とする儀式であった。

門を食い破り出ようとした悪魔であったが、管理局の動きに儀式は中断。

自分の中に入り込んでいた悪魔は己の物とも言わんばかりに、印を残していった。

その印は呪いであった。

身を苛み、心を汚し、命を削る。

そんな自分は研究者からしたら、素晴らしい研究対象だったのだらう。

管理局は積極的に実験への参加を求めた。それをくい止めたのがフェイトさんだった。

保護責任者になり、自分を守ろうとしている。
生きている間は……。

「はあ」

ルキフェールはまた盛大に溜め息をつき、ままならない現実には頭を痛める。

ルシファアの様子でも見に行くかな。

ルキフェールは気分を変えようと自室に向かった。

今日はバルディッシュとお留守番してるし、会話には困らないだろうと。

すぐにフェイトがバルディッシュを回収して出掛けることも知らずに……。

サウンドステージ01（03、5）

黒猫は朝日を浴びながら寝ていた。

黒猫はただの黒猫ではない。

ルキフェルの使い魔ルシファーであった。

ルシファーはバルディッシュの側で寝ていた。

黒猫は夢を見る。

優しい猫の夢を……。

「ここはどこでしょうか？」

まるで貴族の屋敷のような場所にルシファーはビクビクしながら、歩いていく。

屋敷の一室に一人の女性がいた。

見知った杖を手に涙を流していた。

「ねえプレシア私あなたに実は嫉妬してたんですよ」

目に浮かぶのは後悔、そして諦観。

ルシファーには女性が誰か分からなかった。

でもとてつもなく胸を締め付けられた。

「フェイトが私の子供だったら、良かったなって。そしたらこの手で抱き締めて、うんと可愛がれたんです」

「だけどプレシアの使い魔でなかったらフェイトにアルフに出会ってなかった。だから嫉妬より感謝の方がちょっとだけ多い」

優しい微笑みを浮かべた女性。

綺麗だとルシファ―は思った。

誰かの為に生きたその女性を。

「おやすみなさい。可愛いアルフ、愛しいフェイト」

「さようなら私の意地悪で偏屈でちつとめ優しくないご主人様」

「バルディツシュ、あの子達をよろしくね」

バルディツシュが光を放ち応える。

そしてそこには一本の杖が残った。

ルシファ―は目から涙が溢れるのを止められなかった。

使い魔としての契約を終え、消えていった女性。

彼女がどんな契約をしていたかは知らない。

でもとてつもなく綺麗だった……。

その生き方。

その在り方。

ルシファ―は奥歯を噛み締めて、新たに現れた女性と幼いフェイトとアルフを見つめた。

フェイト達は杖を受け取ると部屋から出て行き、女性が一人残った。

哀しげに目を揺らし、涙を流していた。

「ごめんなさいリニス……ごめんなさい」

何度も謝る女性。

涙は大粒になつて零れ落ちていく。

消えていった女性は戻らない。

悪であらなければならぬ自分ではフェイトを汚してしまう。

だからリニスに育てさせた。

だから自分はフェイトに会わないようにした。

ルシファ―には何故か女性の思いが流れ込んできていた。

深い後悔と懺悔、それでもと燃え上がる決意。

それから、リニスと呼ばれた消えていった女性に対する嫉妬。

自分の傲慢で生み出した娘を本当の娘のように愛でていた女性に対しての。

ルシファ―が目を覚ますとそこには心配そうに覗き込んできた主が

いた。

「大丈夫？」

「あっはい」

「泣いてるのに？」

ルシファアは目元を触ると温かい雫があつた。

どうしてあんな夢を見たのかは分からない。

でも今自分は彼女と同じ立場だ。

だから生きよう。

彼女のように綺麗じゃなくてもいい。

大切な主と主の家族を守るように。

「大丈夫ですよ、主」

そう言つてルシファアは涙を浮かべながら笑つた。

「いふあい、いふあい」

自室に戻ったルキフェールは夢見が悪かったのか涙を浮かべていたルシファーを心配していると保護者に頬を引っ張られていた。

「フォワード陣で集まって訓練あるって言ったよね、ルキ」

それは笑っていた。

暗い笑みにルキフェールは、ガタガタと身体が震える。

煙草をいくら吸おうが君臨しなかった鬼がいた。

実は儀式に乱入した彼女は悪魔に汚染されて乗り代わられたのではと思うぐらいであった。

「全くエリオから逃げられましたと聞いてびっくりしたんだよ」

頬を膨らましてむくれたように言うフエイトに先ほどまでの恐ろしさはない。

逆に可愛らしい雰囲気であった。

「ううう……ごめんなさいです」赤くなっただ頬をさすり、涙を浮かべながらルキフェールは謝罪を口にする。

「何してたの？」

「煙草吸ってたのです」

言った瞬間に頭に鈍痛が走った。

頭を抱えてうずくまるルキフェール。

それを心配そうに眺めるルシファー。

なかなか微妙な状況がそこにあった。

訓練施設……海上に作られたそれはあらゆる戦場に姿を変える。

そこではフォワードの四名が今後敵対するであろうガジェットもどきと戦闘訓練をしていた。

カプセル形の機械兵器。

その一番の特徴はAMF。

魔力結合を阻害して魔法の行使を邪魔するという魔導師には有効過ぎる兵器であった。そしてAMFを抜いてもガジェット本体の装甲が堅いという、一体倒すのにも見習い魔導師では苦勞するレベルであった。

今回フォワードが戦うガジェットもどきは装甲の堅さ、AMFの強度を下げ、対AMF戦の動きを経験させることに意味があった。訓練校や普通の現場では相対することすらない相手。

そして、機動六課が必ず敵対する相手。

故に少しでも早くAMF下での戦闘に慣れて貰わなくてはいけない。

危なげながらガジェットを倒した四人は、なのはにより訓練施設のある場所に集められる。

そこにはルキフェールとルシファーがいた。

「主、大丈夫ですか？」

「大丈夫。私はフルバックだよ」使い魔の心配を浮かべる顔にルキフェールは笑みを浮かべて答える。

「ルクス、セットアップ」

ルキフェールの腕輪としてあったストレージデバイス、ルクスはルキフェールの声に反応して、展開された。

それは翼であった。

一本のスラスタから放たれる青白い魔力がまるで天使の翼のように象る。

それはまるで悪魔の翼のように冷たい印象を与えた。

「ルキフェール、綺麗……」

「可愛いよルキフェール」

フォワード陣の内二人ライトニング分隊の赤い髪の少年エリオと桃色の髪の少女キャロの言葉にルキフェールは頬を赤く染めて、空に舞い上がる。

この二人は訳ありでルキフェールと同じくフェイトが保護責任者になっていた。

ルシファールはスターズ分隊の青い髪の少女スバルと橙色の髪の少女ティアナの引きつった顔を見て哀しげに空を見上げる。

そこには片翼で空を舞う少女がいた。

胸の前で手を合わせ、目を閉じる姿はどこか儚げで、今にも砕け散りそうであった。

ルシファールは小さく呟く。

「
」

それは誰にも届かず

、風に消えていった。

それは故人に誓いであった。

機動六課部隊長室で八神はやては迷っていた。

ルキフェールの扱いについて。

もし絶大な力を発揮したら、機動六課の試験運用が終わった後にどんな所が引き抜こうとするか分かったものじゃない。

かといってルキフェールの力を温存して戦えるような余力は機動六課にはない。

はやては盛大に溜め息をついて訓練施設の方に目を向けた。

黒が走る。

それは風のように走り、敵に接近すると持ち前の身体の柔らかさをバネに蹴りを放つ。

まるでゴムのようなしなやかで放たれた蹴りは、放った者の身長には似合わず鈍い音を響かせて金属で出来たガジェットをへこませて、ビルの壁へと叩きつけた。砂埃をパンパンと払う燕尾服に身を包む猫耳の少年。

「次は誰ですか？」

獰猛な獣のような笑みを浮かべてそう告げた。

『ルシファー似合わないです』

「主、ひどいですよ」

念話で即座に切り捨てられて涙目を浮かべるルシファー。

『いいからどくです、羽根を叩きこむです』

ルキフェールの念話により告げられたことに冷や汗をながしたルシファーは一気に跳躍して後ろに跳躍する。

「食い破れ、ルクスフェザー」

ルシファーが後退するのを確認したルキフェールは片翼の翼から羽根を射出する。

青白い羽根は、まるで餌に群がるかのようにガジェットに殺到する。避ける間もなく放たれたそれはガジェットへと次々に刺さり、ガジェットの回路に達して動きを阻害する。

そこに飛び込むのは、ルシファー。

射出が終わるのを待たずに飛び出したルシファーは、動きが鈍ったガジェットに容赦なく蹴りを入れる。

五機のガジェット相手に大立ち回りするルシファーは、脚だけでガジェットの捌く。

まるで手を使わせてみるでも言わん動きにルキフェールはクスリと笑みを零す。

飛行魔法を使い、空から殲滅。

それがルキフェールの戦い方であった。

しかし、ルキフェールが望んでこのスタイルをとったわけではなかった。

ルキフェールは極端に身体能力は低い。

それこそ、2歳〜3歳下の子と殴り合えばすぐに負けてしまうように。

走れば息切れは当たり前。

故に空を飛ぶ。

普通はそのような考えにはならないのだが、そこで影響を与えたのがルキフェールのデバイス、ルクスだった。

空気中の魔力を取り込みスラスターのような役割を持つそれは、ルキフェールに負担をかけないように飛行魔法を発動させた。

しかし、ルクスはそれに容量のほとんどをとられているため、管理局からしたら欠陥デバイスであった。

なにせデバイスの支援がないため、誤差修正などが出来なく、自身で魔力計算、展開、射出をやらなければならないのだ。

そこでルキフェールが選んだのがルクスフェザーという広範囲に魔力弾をバラまくという魔法。

デバイスの補助なしでいちいち狙いを付けるのが面倒だと、数を撃ち出せば当たるだろうと……。

ルクスはこの魔法に関しては高速詠唱の補助しかしていない。

だからルキフェールにほとんどの負担がかかっていた。

「ルシファー、終わらせるよ」

「はい、主」

ルシファーが下がるのを確認せず、再度放たれる羽根の群れ。そして巻き上げられる砂埃を貫く一迅の風。

「エアロランス！」

ルシファーが下がりながら手に溜めた魔法を放つ。

その魔法は槍であった。

不可視の槍はガジェットのアームをもろともせず、ただ貫き突き進む。

ガジェット全機撃破したルシファーは心配そうに主を見上げた。

凄い……

ただただそう思い、ティアナ・ランスターは知らず拳を作っていた。空からの爆撃に似た射撃。

自分に出来るかと訊かれたら無理だと答える。

魔力弾に魔力コーティングするという自分の無茶をやらかして、尚且つ四人でようやく倒せたのに。

アレはなんだ？

圧倒的な弾幕、さらには蹴りだけでガジェットを破壊する使い魔を
使役する。

バグ？

チート？

ふざけるな、凡人の私では届かない所で地を這い蹲るのがお似合い
だとしても嘲笑うつもりか。

「えっ」

睨むようにルキフェールを見ていたティアナはルキフェールの口元
から赤い液体が伝うのを見た。

すぐにルキフェールが拭ったから再確認は出来ない。

でもあれは、血であった。

ティアナはそう確信する。

周りは、ルシファールとガジェットの戦いを見ていたようで、空に浮
かぶだけのルキフェールを見てはいない。

攻撃は受けてはいない。

ならば何故血を？

飛行魔法使用中に口を切った？

それならいい。

ドジねーで済む。

だけど魔力を使うことで内蔵を傷つけていたら？

そんな馬鹿なことをしながら、魔法を使う？

どうしてそこまでする？

分からない。

ティアナが頭の中で答えの出ない思考に埋没してある考えに至った時、隣にいた腐れ縁とも言えるスバル・ナカジマが声をかけてきた。

「ティアアどうしたの？」

「！……何でもないわよ」

そう言っただけで放すように言うティアナの顔は青ざめていた。

「体調が悪いなら……」

「違うわよ、ちょっと嫌なことを思い出しただけよ」

ティアナが導き出した解は

死にたがっているんじゃないだろうか

なのは達の下に戻ったルキフェールを待っていたのは爛々と目を輝かせる義理の兄妹であった。

「ルキフェール、強いんだね」という言葉から始まり、誉め言葉の連続にルキフェールは頬を赤く染めて、恥ずかしそうに俯いた。

そんなルキフェールをルシファアは微笑ましく見ながら、ティアナの視線が心配そうに揺れているのを確認した。

『主、ティアナ殿に吐血がバレた可能性が』

ルシファアの報告にルキフェールは身を強ばらせる。

もしなのはに伝わったら、そこからフェイトに流れたら……。

待っている地獄に恐怖して冷や汗が背中を伝う。

『現状維持、最悪飛行魔法で口内を傷付けたことに』

『……承知しました』

不服そうに顔を歪めるルシファアにルキフェールは一睨みして念を

押す。

バレるわけにはいかない。

あの優しい人達のためにも。

ルキフェールは拳を握り締め、笑顔を浮かべた。

初訓練から少し時間がたったころ、ルキフェールはモニターを前に眉を寄せていた。

モニターに表示されているのは一通のメール。

差出人レジアス・ゲイズ。

管理局地上本部のトップに座り、機動六課を目の敵にしているが、会う度にお菓子をくれる優しいおじさんであった。

「主、開かないのですか？」

冷や汗を浮かべながら、訊くルシファー。

コーヒーの入ったコップを持つている手はガタガタと震えている。

「……ルキフェールちゃん、早く開けちゃった方がいいですよ」

水色の髪の少女、リインフォース・ツヴァイがそう声をかける。

彼女、女の子が遊ぶ着せ替え人形くらいの大きさで浮いているのだ。

ルキフェールはリインの言葉にパネルを操作する。

表示されるメールに周りが息を飲む音が聞こえた。

ルキフェールは対面に座る能面のように表情を無くした部隊長八神はやての表情を見る。

冷たい目でメールを読む様子はまるで親の仇を見るかの如く。

差出人：レジアス・ゲイズ

用件：体は大丈夫かね？

本文：機動六課に出向扱いと聞いていたが、そこには君の家族もいるし、問題はないだろう。

それと前回の定期健康診断をサボったようだが、何か問題でも起きたのかね？

あまり家族に心配をかけぬようにな。

「……………」

「……………」

「……………」突如席を立ち、逃げ出そうとするルキフェール。

しかし、がっしりと肩を掴まれていた。

振り返ると笑顔のフェイトがいた。

その笑顔にルキフェールは顔をひきつらせる。

「ルキ……………」ちよつと向こうでお話しようね」

「あう……………」おじ様のばかあああ！」

引きずられていくルキフェールは恨みの籠もった声を残していった。

「レジアス中将って……………」あんなんやつけ」

はやてが普段接する自分の毛嫌いしている相手の意外な一面に頭が痛くなるのを感じる。

「大丈夫ですか？はやてちゃん」

リインフォースがはやての周りをくるくる飛びながら訊くと大丈夫やよと手をふってお茶を飲んで見なかったことにしようと部隊長室へと戻っていく。

「まるで孫の相手をする爺さんだな」

外見からは子供にしか見えないというヴィータがそう呟いてお茶を飲み干していた。

「エリオ、キャロ、ルシファー！ 助けるですううう」

その日機動六課はいつも以上に平和であった。

「何このデバイス、許容量いっぱいじゃないですか」

デバイス整備室。

そこには様々な機器とフォワード陣の新デバイスが鎮座していた。その中で異色のデバイス、ルクスを前にデバイス整備員達は唸っていた。

ルクスはルキフェールの運動能力のなさを支援する飛行魔法一辺倒なデバイスである。

それは管理局の整備員からしたら欠陥品でしかなかった。

どのような状況でも対応出来るように、持ち主に合わせて作るのが大事であって、持ち主にのみ合わせて作られて他の対応が出来ないルクスは正くらい欠陥品であった。

下半身付随の方の支援デバイスとしてのプロトタイプとして研究しないのは管理局の魔法は力という捉え方からだろうか？

この場合2つデバイスを持たせるという手もあるが、なかなか難しい。

2つ使うということは2つに魔力を持っていかれてしまう。

2つのデバイスをスバルの新デバイスのようにシンクロさせて消費魔力を軽減手もあるが、ルクスにそんな許容量はない。

結局ルクスの許容量をどうするかが問題になってしまう。

「どうしますこれ？」

「受け渡し明日ですよ」

「どうしようか……」

一番の問題がデバイス調整の期間だ。

現在フォワードは管理局員が一般的に使う杖を使って、魔力運用の訓練をして貰っている。

自分の慣れ親しんだデバイスを使うというのは難しい。

例えばスバルだ。

ローラーブーツで滑走、リボルバーナックルで殴りつけるという完璧なインファ이터にミッド式の中距離仕様の杖は使えない。

今頃杖の扱いに四苦八苦しながら、憧れのなのはのディバインバスターを使おうとしているのだろう。

ルキフェールの場合は完璧な固定砲台。

弾幕を張って近付かせず、近寄られた場合はルシファーに任せるという戦い方であった。

普段と違い飛行魔法を使用してない為、近寄られる数にルキフェールとルシファーは苦戦していた。

なにセルシファーが抜かれたら、ルキフェールは緩慢な攻撃であっても避けきる自信がないのだから。

空なら加速魔法で逃げるが、地上なら転ぶこと請け合いだった。

「なのはさんに相談するしかないね」

そう一人の女性が呟き、通信用のパネルを展開する。

「主、どうします？」

「どうしようか……」

訓練が終わった後、ルキフェールは医務室の前にいた。定期健康診断をサボったことをフェイトにバレて何か問題がないか調べる為である。

囑託魔導師とはいえ、現場に出て戦闘を行う身である以上、健康の証明が出来ない限り戦わせてはもらえない。

重大な欠陥を抱えていては部隊全体を巻き込む失敗に繋がるからだ。

「逃げたいなあ」

「無理ですね」

本音をこぼすと使い魔からあっさりと切られてルキフェールはうなだれる。

「仕方ないか……失礼します」

「ルキフェールちゃん……これはどういう事かな？」

青筋を浮かべた女性がルキフェールの前に仁王立ちしていた。

身から放たれる怒気にルシファアは着いて来るんじゃないかと溜め息をはいく。

宙に表示されたルキフェールの身体情報にはエラーの嵐。

ちゃんとした設備でちゃんとした手法を持って行ったのに。

診断結果はエラー。

つまりは今ルキフェールの状態が分からないと表示されているのだ。

魔法による阻害ではないのは、仁王立ちする女性シャルも分かっている。

分かっているからこそ理解出来ない。

まるで人ではない何かを診断したかのようにだ。

自分の考えを即座に否定する。

自分の目の前にいる小さな少女を断ずるなんて出来ない。

ほっそりとした腕。

小さくなだらかな肩。

少しきつめの目は年相応に愛くるしく、その目には涙が溜まりかけている。

「ルキフェールちゃん……なんでエラーが出たか分かってるんだよね」

「……はい」

肩を震わせるルキフェールをシャルは優しく抱き寄せる。

「私はもう……」

部屋の中には沈黙が蔓延していた。

シャルは口を開き、何か言おうとするが頭が状況に着いて行けずに口を開いては閉じていた。

「私はもう“死んで”いますから」

「私は私自身の使い魔なんです」

告げられた言葉は頭をパンクさせるには充分であった。

使い魔とは、仮初の命。

使い魔が死亡の直後か直前に魔力による人造魂魄を宿らせる技術。

ルキフェールの言葉を聞く限り、彼女は死亡直後の使い魔精製をしたことになる。

「でも……ルキフェールちゃんは」

「うん、ここにいます。ううんいなくちゃならないのです」

シャルがようやく絞りだした言葉に続けるようにルキフェールは呟く。

そこにはシャルがよく知る物があつた。

自分達が主はやての命を救うために決めた意志。
自分達を助けようと向かってきたなのはやフェイトの意思。
主はやてを救うため1人空に消えた彼女の想い。

薄氷の上でも駆け抜けることに躊躇しない。

目標しか見えていない一種の危うさがルキフェールの中にあった。

「私は……私自身かのじよとの約束を守らないといけないから」

告げられた言葉に宿る意志にシャルは膝を着く。

自分では止められない。

狂気じみた行為をしてまで生き長らえた彼女を止める言葉は自分にはない。

その様子にルキフェールは部屋から出て行くつもりでいた。

「みんなには内緒ですよ」

可愛らしくそう言ったルキフェールの表情は無理をして作った笑顔であった。

あれから、ルキフェールはぶらぶらと歩いて、海岸に向かっていった。

空はまるで焼けたように赤く染まり、遠くに揺らめく太陽が見えた。ルキフェールは寒そうに肩を抱き、海の向こうを睨むようにしていた。

「私は……ルキフェール。私^{かのじょ}じゃない」

呟いた言葉影響されたように目尻に涙が溢れてきていた。

「私は……ここにいないかならない。でもここにいていいのかな？」

自分が人として駄目な存在であることは分かっている。

思い出すのは、儀式から救い出されてしばらくした時のこと。

「馬鹿なこと言わないで下さい！」

病院の廊下を虚ろな瞳のルキフェールが歩いていると突如怒鳴りつける声が聞こえた。

その声に導かれるように近付いた部屋にはルキフェールを救い出したフェイトと管理局の服を着た三人の男達がいた。

「フェイト執務官、落ち着きたまえ。君とて管理局が人材不足なのは知っているだろ？」

「それは……はい」

「ならば、彼女の身体を研究して悪魔の力を取り出せないか、有効活用出来ないか調べるのは当然だと思わないか？」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべた男の言葉にフェイトは嫌悪感を隠すことなく、表情に出す。

「あんな小さな女の子を研究の為に犠牲にする気ですか？」

「どうせ彼女は長くないよ、生きて一年最悪2ヶ月だね」

フェイトの言葉を受け流すようにして男は書類を手に告げる。

「だったらその残された時を幸せに過ごしてもらおうとは思わない

んですか？あんな小さな子供を犠牲にするのがあなた方の正義なのですか？」

フェイトの言葉に首を傾げる男達。

正義？

幸せ？

なんだソレはと言わんばかりの男達にフェイトは背筋が冷たくなる。研究者は一部命を命と見なくなるとは聞いたことがあるがここまで狂っているとはフェイトも思わなかった。

カタンつと扉から小さな音がしてフェイトが目を向けるとルキフェールがいた。

儀式のショックで何を見ているのか分からない虚ろな目。

手足の包帯は未だに取れず、痛々しい姿であった。

「私はもう生きてちゃだめな子なの？」

まるで事実を確認するかのような抑揚のない声がした。

「そんなことはない君の身に宿した力は……」

「黙れ！」

フェイトの激昂が男の言葉を止める。

フェイトはゆっくりとルキフェールに近付いていく。

「……」

「大丈夫だよ、私が守るから」

そう言つてフェイトがルキフェールを包むように抱き締めると虚ろな瞳から涙が流れていた。

「あの日救ってもらった心（彼女）の為に私は……」

ルキフェールが空を仰ぐとそこには月があった。
ただ静かに光を灯した月が……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1607ba/>

魔法少女リリカルなのは～悪魔に魅入られた少女～

2012年1月14日15時48分発行